

本年度の重点目標	分掌	本年度の重点目標を達成するための課・学年での重点目標 (めざす具体的な姿)	本年度の重点目標を達成するための課・学年内での具体的方策 (教育活動)	評価基準	中間自己評価 中間期の達成状況・課題	総合評価 (中間評価)	最終自己評価 年度末の達成状況	評価基準 に対する評価	総合評価 (最終評価)	本年度の課題と次年度の方策
1 多彩な学びを支え、個を生かす学習指導	教務課	「千鳥型学習指導のスタンダード」に基づく授業の実践、および継続的な指導の改善を推進する。	校内互見授業と公開授業において、授業実践の成果と課題を教員間で共有できるよう、指導改善の意見交換につながる枠組みを整える。	学校評価アンケート(生徒)で評価。 「笠岡高校で行われている授業は、魅力的で、意欲的に取り組みたくなる授業ですか。」 ①はい・そう思う ②だいたいそう思う ③あまりそう思わない ④いいえ・そう思わない ①＋②の割合(昨年度70%) 4:75%以上、3:70%以上、2:65%以上、1:65%未満	・6月実施予定の校内互見授業は予定を変更し、11月の公開授業週間を中心に実施する。 ・臨時休業中にはICT機器を活用し、ライブ配信授業、オンデマンド配信授業等について、積極的かつ協働的に授業開発に取り組み、生徒の学びを保障することができた。	B	・11月9日から20日の期間に校内互見授業を実施した。積極的な意見交換の結果、教科指導について知見の共有が図れた。 ・学校評価アンケート(生徒)の該当項目の肯定的回答(①＋②)の割合は78%であった。 ・臨時休業中のICT機器を活用した授業や学習、Gsuite等を活用した授業改善を学校全体で堅実に進めることができた。	4	A	・各教科での実践を他教科の教員も共有できるように、互見授業で自分の教科以外の授業を参観しやすい方策を立てる。 ・ICT機器(特にiPad関連)の環境整備とそれらの活用事例の蓄積、共有を関係課と協働して進める。
	教務課	習熟度別少人数授業の効果を高める工夫について実践し、成果を共有する。	学力向上委員会と協働し、習熟度別少人数授業の効果を高める工夫についての実践を各教科に促し、その成果を共有できる枠組みを整える。	学校評価アンケート(生徒)で評価。 「選択授業や進路志望、習熟度等で講座を分けた授業は、あなたの学力の向上につながっていると思いますか。」 ①はい・そう思う ②だいたいそう思う ③あまりそう思わない ④いいえ・そう思わない ①＋②の割合(昨年度86%) 4:90%以上、3:85%以上、2:80%以上、1:80%未満	・教科会議等で定期的に情報交換を行っている。 ・11月に実施する校内互見授業によって、教科内での意見交換を活性化させる。	B	・学校評価アンケート(生徒)の該当項目の肯定的回答(①＋②)の割合は91%であった。 ・教科会議等で定期的に情報交換を行なった。	4	A	・習熟度別授業について、異学年の取組について教科会議で共有し、その成果を各学年に反映するなど協議を深めやすい方策を立てる。
	進路課	主体的な学びにつながる教科カウンセリングの充実を図る。	土曜日学校開放講座、考査前質問教室、教科面談等により、習熟度別の学びを促進し、主体的な学びにつながる指導の充実を図る。	生徒アンケートで評価。 「土曜日学校開放、考査前質問教室、教科面談等はあなたが自ら学び方を身につけるための指針となっていますか」 ①はい・そう思う ②だいたいそう思う ③あまりそう思わない ④いいえ・そう思わない ①＋②の割合(新規アンケート) 4:80%以上、3:75%以上、2:70%以上、1:70%未満	・土曜講座で異学年合同講座、ラーニングコモンズ等を新規導入した結果、昨年同時期比較で参加生徒数が47%増となっている。 ・土曜講座、考査前質問教室ともに実施講座数が増加、充実した。 ・教科面談は10月ハイレベル模試を契機に本格実施できている。	A	・土曜日学校開放の日数を昨年度より減らし、部活動や検定の影響がない日に設定した結果、講座数34.0%増、参加者42.5%増となった。 ・生徒アンケートの結果は、肯定的回答(①＋②)の割合が88.4%であった。特に1年生を中心に満足度が高かった。	4	A	・生徒アンケートの記述から、ラーニング・コモンズの存在が周知されてないことが分かった。 ・複数の講座が同じ時間に開かれるので、授業やプリントをクラウドに保存するなど、生徒のニーズに応えられる方法も検討していきたい。
	1年団	個々の生徒の進路目標に対応した学力を培うために、学ぶ意欲と基礎学力を身につけさせる。	進路課学習係・教科担任と連携し、学年全体で提出物指導や教科補充指導を行う体制を整える。	学校評価アンケート(生徒)で評価。 「笠岡高校の教育は、あなたの学力を最大限に伸ばすものになっていると思いますか」 ①はい・そう思う ②だいたいそう思う ③あまりそう思わない ④いいえ・そう思わない ①＋②の割合(前年全体:76%、1年生:71%) 4:75%以上、3:70%以上、2:65%以上、1:65%未満	・臨時休業中の登校日、および第1回考査中の放課後に3科を中心とした質問教室を実施した。 ・提出物指導や考査中の自習教室の開放は進路課と相談のうえ計画的に実施できた。 ・教科補充指導は平日放課後に数学を、土曜講座で国語、英語を実施している。	B	・学校評価アンケート(生徒)の該当項目の肯定的回答(①＋②)の割合が84%(③＋④は8%)であった。 ・進路課と連携しながら実施した考査中の自習教室の開放や3科を中心とした教科補充指導が奏功したと思われる。	4	A	・土曜講座の出席率や考査中の自習教室の利用が徐々に下がりがつつあるので、発展層向けの講座と基礎学力層向けの講座をバランスよく開講する工夫を行うと同時に、個別の教科カウンセリングや質問対応などの機会を増やす。 ・また、生徒、教員共に負担感なく教科補充指導が継続できるよう取り組み方を工夫する。
	2年団	「なぜ？」と問う主体的な学習姿勢を育て、課題解決力を身につけさせる。	基礎学力層と標準学力層の生徒を主な対象とした学び直しの機会を設けるなど、習熟度別の個に応じた学習支援をおこなう。	生徒アンケートで評価。 「ガリ勉教室などのサポートによって、今まで分からなかったところが分かるようになりましたか。」 ①そう思う ②だいたいそう思う ③あまりそう思わない ④そう思わない ①＋②の割合(新規アンケート) 4:80%以上、3:60%以上、2:40%以上、1:40%未満	・学び直しの機会の設定について、長期の臨時休業中の登校日ごとに質問会を開催し、学校再開後の土曜講座で基礎、標準、応用の習熟度別講座を設定した。 ・後期に向けて、さらに必要な支援のあり方を再検討していく。	B	・学習サポートの内容を変更し、春の休業期間中の教科ごとの質問教室、土曜講座での習熟度別講座等、習熟度に応じた形で実施した。 ・内容変更のため、当初予定していた生徒アンケートとは異なるアンケートを実施した結果、8割以上の生徒が、習熟度に応じた学習支援により、今まで分からなかったところが分かるようになったと感じていることが分かった。	4	A	・感染対策の必要性から、実施形態の見直しの必要に迫られ、当初予定していた形での支援が実施できなかったものがほとんどであった。また、学力層の多様さから、一律の指導への限界も感じた。 ・学力層というより、個々の進路志望に応じた支援が必要である。個々の志望を把握し、適切な時期に適切な支援をすることで、自ら学ぶ姿勢を育てたい。
			発展学力層の生徒を主な対象とした高い志を持つ難関大学志望者のチームを作り、意識向上と行動変容を促す。	生徒アンケートで評価。 「チーム難関の取り組みの中で、学ぶ意欲が高まりましたか。」 ①そう思う ②だいたいそう思う ③あまりそう思わない ④そう思わない ①＋②の割合 4:80%以上、3:60%以上、2:40%以上、1:40%未満	・9月の難関校ガイダンスを難関指導の立ち上げの場として位置づけ、発展学力層のチームを発足させた。今後、教科ごとに意識付けの取り組みをおこなっていく。	B	・高い進学目標をもつ生徒への学習支援として、ハイレベル模試の受験案内や結果返却会、教科ごとの添削課題等の個別学習支援等を実施した。	3	B	・チームの形での支援はほぼできなかった。主に個々の意識向上を促す個別の対応となった。限られた放課後の時間などで生徒を招集したりすることは難しく、路線変更の必要を感じた。 ・生徒個々の志望を明確にする支援にシフトしたい。

本年度の重点目標	分掌	本年度の重点目標を達成するための課・学年での重点目標 (めざす具体的な姿)	本年度の重点目標を達成するための課・学年内での具体的方策 (教育活動)	評価基準	中間自己評価 中間期の達成状況・課題	総合評価 (中間評価)	最終自己評価 年度末の達成状況	評価基準に 対する評価	総合評価 (最終評価)	本年度の課題と次年度の方策
1 多彩な学びを支え、個を生かす学習指導	3年団	自ら学習面での課題を見つけ、それを解決するために即座に行動に移す姿勢を身につけ、家庭学習時間を安定的に確保させる。	受験生としての自覚を高める呼びかけや学習支援の充実を図り、学習意欲を高める。また、基礎学力層の生徒については必要に応じて、授業の予習復習状況の把握、課題の点検などをこまめに行い、適切に指導する。	学習実態調査の1週間の平均学習時間で評価。 (昨年度2年：4回平均182分) 4：270分以上、3：230分～270分 2：190分～230分、1：190分未満	・学習実態調査は第1回(4月)205分、第2回(9月)205分であった。 ・2年次と比べて4月は学習意欲が少し向上していたが、長期臨時休業の影響もあり、9月時点で受験生として十分な学習量ではない。 ・進路目標達成のために学習量の増加が不可欠であることを全ての場面で訴えていく必要がある。	B	・学習実態調査は計2回(4、9月)いずれも205分であった。 ・9月時点で3年生として学習量は十分でなかったが、学年団全員がそれぞれの立場(担任、教科担任、学習係、学年主任等)から粘り強く指導した。 ・9月以降は推薦入試に向けた個別指導の準備期間を多くとり、計画的に個別指導を行うことにより生徒の意欲向上につなげることができた。	2	B	・長期の臨時休業による学習意欲の低下を防ぐことや、休業明けに学習意欲を回復させることが難しかった。 ・オンライン授業や自習課題の設定、学習スケジュールの提示等、自宅学習の環境整備が有効であることが分かったので、再度同様のことが起こったときには、今回の知見を生かし実施していきたい。
		発展・標準・基礎それぞれの学力層の生徒に応じた教育活動を行い、進路実現に必要な学力を身につけさせる。	習熟度別の授業や課題、土曜学校開放講座がより効果的なものになるよう、学年団全体で工夫する。また、個別指導や教科面談を中心とした指導で、発展・標準・基礎それぞれの学力層の生徒をきめ細かに支援する。	学校評価アンケート(生徒3年)で評価。 「笠岡高校の教育は、あなたの学力を最大限に伸ばすものになっていると思いますか。」 ①はい・そう思う ②だいたいそう思う ③あまりそう思わない ④いいえ・そう思わない ①＋②の割合(昨年度2年：73%) 4：75%以上、3：70%以上、2：65%以上、1：65%未満	・習熟度別授業の講座分けは生徒の希望を重視して行い、それぞれの集団に合う授業を展開できている。 ・土曜講座は参加人数が少ないがねばり強く参加を呼びかける。 ・教科面談、添削指導等の個別指導を今後さらに活発に行っていく。	B	・学校評価アンケート(生徒3年)の該当項目の肯定的回答(①＋②)の割合が86%であった。 ・習熟度別講義は通常授業に留まらず土曜講座や8限補習等でも可能な限り実施した。 ・講座選択において生徒の希望を尊重したことが高い満足度につながったと思われる。	4	A	・個別指導は実施したが、生徒の意欲向上を促すためにも、さらに組織的にきめ細かく実施すると効果があると感じた。 ・通常授業や土曜講座、8限補習等あらゆる講座を対象に、可能な限り習熟度別の設定ができるよう工夫していく。
2 地域とともに、全校体制で取り組むキャリア教育	生徒課	ボランティア活動や社会貢献活動への積極的な参加を促し、社会へ寄与することの大切さを認識させる。	千鳥ボランティア(1回)、各種ボランティア活動、校外の地域の活動等への積極的な参加を呼びかける。	千鳥ボランティア等の校内外のボランティアへのべ参加者数の計で評価。 (昨年度：千鳥(6月)285、他91、計376) 4：400人以上、3：360人以上 2：320人以上、1：320人未満	・臨時休業明け直後のため6月に千鳥ボランティアは実施できなかった。 ・学童ボランティア、駅前イルミネーション実行委員等の有志ボランティアへの支援に注力した。 ・カプトガニ保護啓発活動の功績によりサイエンス部が白梅賞を受賞した。 ・地域が募集する各種ボランティア活動等は、感染症への配慮をしつつ情報の周知に努める。	B	・ボランティアの参加者は約40人。 ・例年秋に実施している1・2年生の笠岡駅前筋の清掃は実施したが、生徒会主催の千鳥ボランティアは日程が確保できず中止した。 ・12月19日から1月31日まで開催された笠岡駅前イルミネーションは、制作計画や当日の指示、会計など、生徒主体で活動することができた。	1	B	・笠岡市の夏ボラなど各種ボランティア活動は募集そのものが少なく、また先方の都合もあるので、あまり積極的に出かけることは難しかった。 ・次年度は、感染症への配慮をしつつ、千鳥ボランティアや地域でのボランティア活動、あるいは地域の行事などへの参加を増やしていきたい。
		3年間を見通した進路指導により、早期に志望校を固め、進路実現に向けて努力する姿勢を生徒に身につけさせる。	進路の手引きを基本とした進路シラバスに則って、教員の共通理解を図り、生徒面談、ACT、進路LHR等を通じて、生徒の志を育む個に応じた進路指導を行う。	学校評価アンケート(生徒)で評価。 「笠岡高校は、面談などを利用して一人ひとりの生徒に応じた進路指導を行っていますか。」 ①はい・そう思う ②だいたいそう思う ③あまりそう思わない ④いいえ・そう思わない ①＋②の割合(昨年度：生徒93%) 4：95%以上、3：90%以上、2：85%以上、1：85%未満	・各学年の学習通信や進路LHR、担任面談で進路の手引きを活用している。 ・さらに充実した活用方法を今後検討する必要がある。	B	・学校評価アンケート(生徒)の該当項目の肯定的回答(①＋②)の割合は92%であった。 ・進路の手引きを活用する機会を増やした。クラウドを活用し、生徒面談での記録を教員間で共有しやすくした。	3	B	・進路の手引きの活用状況を総括し、来年度は、教員も生徒も使いやすいものにしていきたい。 ・生徒昇降口に進路掲示板を設置し、生徒主体で欲しい情報の調査、掲示等を行った。 ・進路アンケートで生徒の要望を聞いたので、生徒の必要とする情報も進路掲示板等を通じて発信していきたい。
	進路課	地域的人的・物的資源を活用して、生徒に自らの人生と社会との関わりについて主体的に考えさせ、進路選択をさせる。	生徒が自らの人生と社会との関わりについて主体的に考える能力を身につけられるよう、おかやま子ども応援事業における地域学校協働活動推進員との連携を図ったり、大学の出張講義等を活用したりして、本物に触れる機会を増やす。	生徒アンケートで評価。 「ACTでの外部連携による活動や学校で案内している外部の行事はあなたの進路選択に役立っていますか。」 ①とても役立っている ②役立っている ③あまり役立っていない ④役立っていない ①＋②の割合(昨年度86%) 4：90%以上、3：85%以上、2：80%以上、1：80%未満	・地域学校協働活動支援員と連絡を密に取り、地域学における地域と学校の橋渡し役を適切に担ってもらえている。 ・大学の出張講義等はオンラインに変更しほぼ実施できた。 ・中止した大学訪問の代替となる、ガイダンス行事を強化している。	B	・生徒アンケートの該当項目の肯定的回答(①＋②)の割合は80%であった。 ・コロナ禍において、外部連携の機会が得られず、生徒が本物に触れる機会が少なかった。 ・外部講師による、リモートや対面でのガイダンスを実施し、生徒が進路について考える機会は提供できた。	2	B	・生徒は外部講師の講演会等を、直接的に役立つ、役立たないと判断する傾向があるので、外部連携の意義について丁寧に説明していく。 ・コロナ禍の収束後は、本物を見て自ら考える機会を積極活用していきたい。

本年度の重点目標	分掌	本年度の重点目標を達成するための課・学年での重点目標 (めざす具体的な姿)	本年度の重点目標を達成するための課・学年内での具体的方策 (教育活動)	評価基準	中間自己評価 中間期の達成状況・課題	総合評価 (中間評価)	最終自己評価 年度末の達成状況	評価基準に対する評価	総合評価 (最終評価)	本年度の課題と次年度の方策
2 地域とともに、全校体制で取り組むキャリア教育	図書情報課	生徒が図書及び情報機器を活用し自らの興味関心や学習内容を深めたり広げたりできるよう支援する。	教科等と連携した書籍を選定・購入・配置し、生徒が図書館内外で日常的に活字に親しむ環境を整える	一人あたりの貸出冊数の前年度比較で評価。 (昨年度:2219冊/550人=4.03、前年比94%) 4:前年度の95%以上 3:前年度の90%以上 2:前年度の85%以上 1:前年度の85%未満	・貸出冊数の増加を図るため、図書委員会でクラス別貸出冊数を比べるグラフを千鳥会館2階に掲示し、頻繁に更新している。 ・図書館司書が毎月発行する図書館だよりのほかに、図書委員が毎月「突撃先生のおすすめ本」というチラシを作成し、配布している。 ・前期(4月～9月)の貸出冊数は、797冊であった。前年同期と比べると72%(1101冊)と低調であったが、1ヶ月平均で比べると797冊/4ヶ月=199冊と前年度1101冊/6ヶ月=184冊を上回っている。	B	・一人あたりの貸出冊数は、2/1現在で1596冊/521人＝3.06冊/人となり、昨年度2219冊/550人＝4.03冊/人、昨年度比76%となった。 ・貸出冊数の減少は、4～5月の臨時休業の影響が大きいと考えられる。 ・貸出冊数を増やす方策として中間期に示した諸活動を生徒主体で発案し主体的に取り組む等、図書館内外で日常的に活字に親しむ環境整備にはしっかり取り組むことができた。	1	B	・貸出冊数の減少は、新型コロナの影響とHRの読書会が、年1回に減ったことによるものと考えられるが、コロナ禍の収束後に、図書の貸出冊数が増加するような方法や取り組みを考えていきたい。
	1年団	生徒が社会と自分の生き方の関わりについて考えながら自己の適性を見極め、自身の将来を見据えたコース選択や探究活動に取り組む姿勢を育てる。	地域学を中心としたACTのプログラムを引き継ぎ、さらに充実した取り組みとなるよう、ACT係を中心に学年団の連携を図り、実施する。	「未来開拓力(※)」ルーブリックでの生徒の自己評価において、「教養力」、「思考力」、「表現力」、「協働力」の項目の前期平均値(最大値5)を基準に、12月期の平均値で評価。 4: +1. 0以上 3: +0. 5以上、+1. 0未満 2: +0 以上、+0. 5未満 1: +0 未満 ※本校が育む「未来開拓力」とは、教養力、思考力、表現力、協働力、省察力、志力の6つの力である。	・生徒の自己評価は11月に実施予定。 ・ACTの時間や学年集会で学年団教員が「未来開拓力」を意識してそれぞれの学習活動に取り組むよう生徒に伝えた。	B	・「未来開拓力」ルーブリックでの生徒の自己評価において、前期平均値と後期平均値の差は次のとおりである(前期→後期)。 「教養力」+0.6 (2.3→2.9) = 3 「思考力」+0.6 (2.6→3.2) = 3 「表現力」+0.4 (2.6→3.0) = 2 「協働力」+0.3 (3.0→3.3) = 2	3	B	・「表現力」「協働力」の伸びが低調であり、インプットよりアウトプットが苦手な生徒が多い実態がうかがえる。 ・NIEの取り組み、小論文指導と連携した教科指導、ACT、そして学校行事においても、アウトプットに重点を置いた取り組みを工夫する必要がある。
	2年団	社会と自らの生き方、そして、学問と自らの将来を関連づけて考えることができる、また、自らの未来を自ら拓くという自覚をもち、主体的な志望形成ができる生徒を育てる。	「テーマ探究」を中心としたACTのキャリアプログラムを引き継ぎ、さらに充実させる。	ACTプログラムの改善実績と、外部連携の実績数で評価する。 (前年の外部連携:2件) 4:改善し、外部連携が3件以上 3:改善し、外部連携が1～2件 2:改善し、外部連携が0件 1:前年踏襲のプログラムで実施	・プログラムはSDGsをテーマとする、個人またはグループによる探究に変更した。 ・コロナ禍により継続的な外部連携はできなかったが、アンケートやインタビュー調査に取り組んだグループは積極的に外部連携を図った。 ・「自分と社会との関わりを考える」という2年次のキャリア教育重点目標により適したプログラムとなったと思われる。	B	・さまざまな形態で外部団体と連携することができた。例えば、外部の機関、企業、個人などへのインタビュー調査等を行った生徒は、69チーム中25チームに及んだ。 ・SDGsの視点から身近な問題を考えることで、社会への関心を高め、2年生全体に志望形成を促すことはある程度できた。 ・生徒の探究チームの中には、外部団体が主催する研究発表会へ意欲的に挑戦したチームも出た。	4	A	・キャリアプログラムとしての「テーマ探究」の改善はある程度できたと思うが、そのための教員負担が大幅に増加した。 ・コロナ禍による臨時休業や修学旅行の時期変更などの影響から、ACTプログラムの活動時間が限られ、放課後の時間もかなり使うことになった。 ・社会課題を自分事としてとらえる、という目的を十分果たすことができたチームは多くはなかった。
			「テーマ探究」を中心としたACTのキャリアプログラムの中で、自らを振り返り、改善しようとする場面や主体的に自らの未来を考える場面を増やす。	「未来開拓力(※)」ルーブリックでの生徒の自己評価において、「省察力」、「志力」の項目の前期平均値(最大値5)を基準に、1月期の平均値で評価。 4: +1. 0以上、 3: +0. 5以上、+1. 0未満 2: +0 以上、+0. 5未満 1: +0 未満 ※本校が育む「未来開拓力」とは、教養力、思考力、表現力、協働力、省察力、志力の6つの力である。	・前期自己評価(10月)の結果 教養力3.4 (昨年1月末 3.4) 思考力3.2 (同 3.3) 表現力3.2 (同 3.1) 協働力3.6 (同 3.6) 省察力3.2 (同 3.1) 志力 3.0 (同 2.8) ・プログラムを変更し、探究活動に主体的に取り組む、試行錯誤を重ねるよう促したことが奏功し、省察力と志力が向上した。	B	・後期自己評価(1月仮評価)の結果 教養力3.8 (昨年1月末 3.4) 思考力3.7 (同 3.3) 表現力3.5 (同 3.1) 協働力3.9 (同 3.6) 省察力3.5 (同 3.1) 志力 3.5 (同 2.8) ・前期平均3.3⇒後期平均3.6となり、全項目において向上が見られた。 ・1年次から、時間を追うごとに生徒の自己評価が上がっている。2年間を通じた系統的なACTの取り組みの成果と思われる。	2	B	・キャリア教育の視点から、「振り返り」の機会が増え、生徒は自己の成長をポジティブに評価できるようになっている。しかし、この「振り返り」を次の改善に向けた行動変容につなげる指導が不十分であると感じている。 ・キャリア教育を通じて身につけた資質・能力を、学習面での結果に結びつけられるように、指導方法や支援策を工夫し、生徒の行動変容を促すよう心がける。

本年度の重点目標	分掌	本年度の重点目標を達成するための課・学年での重点目標 (めざす具体的な姿)	本年度の重点目標を達成するための課・学年内での具体的方策 (教育活動)	評価基準	中間自己評価 中間期の達成状況・課題	総合評価 (中間評価)	最終自己評価 年度末の達成状況	評価基準に対する評価	総合評価 (最終評価)	本年度の課題と次年度の方策
3 主体性と豊かなつながりを生み出す生徒指導	生徒課	挨拶をはじめとしたコミュニケーションスキルを高め、好ましい人間関係を形成する能力の向上を図る。	挨拶を日々励行するとともに、マナー講座等の適時実施や声かけにより、社会で生かせる基本的な力の向上を図る。	学校評価アンケート(生徒)で評価。 「笠岡高校の生徒は、学校内や地域で、積極的に挨拶ができていますか。」 ①はい・そう思う ②だいたいそう思う ③あまりそう思わない ④いいえ・そう思わない ①＋②の割合 (昨年度:55%、一昨年度:45%) 4:70%以上、3:60%以上、2:50%以上、1:50%未満	・コロナ禍により年度当初のマナー講座を実施できなかったが、平時の指導で工夫して対応した。 ・生徒会によるあいさつ運動や教員の日々の声かけにより、少しずつではあるが、挨拶ができる生徒が増えている。	B	・学校評価アンケート(生徒)の該当項目の肯定的回答(①＋②)の割合は68%であった。 ・挨拶ができる生徒が年々増えてきている。他者への積極的なコミュニケーションに繋がってほしい。	3	A	・生徒のさまざまな活動の場面は確保し、支援を継続していきたい。 ・一方で、挨拶については日常生活の中で浸透してきているので、次年度以降のあいさつ運動は方法を見直していきたい(生活委員会等で廃止も含め、形態について検討する。)
	生徒課	ホームルーム活動や生徒会活動(各種委員会や学校行事等)への生徒の主体的な参加を促す。	事前打ち合わせや振り返りを取り入れることによって、新入生歓迎行事や千鳥祭等を実行委員や各種委員・係を中心に生徒が主体的に取り組む学校行事にしていく。また、できるだけ多くの委員会で、生徒の主体的な活動に取り組ませる。	学校評価アンケート(生徒)で評価。 「ホームルーム活動や生徒会活動(各種委員会や学校行事等)に、生徒が主体的に参加していると思いますか。」 ①はい・そう思う ②だいたいそう思う ③あまりそう思わない ④いいえ・そう思わない ①＋②の割合(昨年度:生徒89%、一昨年度:82%) 4:90%以上、3:80%以上、2:70%以上、1:70%未満	・各実行委員会を発足させ、生徒同士でアイデアを出し合いながら企画・運営を行った。コロナ禍で諸活動において制約が多くなり、新入生歓迎行事や千鳥祭は、例年とは異なる形での実施となったものの、充実した取り組みとなった。 ・生徒の実行委員に教育用クラウドを活用させることで、資料作成における生徒自身の分業体制を整える支援ができた。	A	・学校評価アンケート(生徒)の該当項目の肯定的回答(①＋②)の割合は89%であった。 ・行事での写真撮影にスマホ使用を許可してほしいという、生徒や保護者からの要望について、生徒会役員が中心となって、クラス討議や評議員による意見集約、ルール作りに向けての活動が始まっている。	3	A	・アンケートの数値は前年と同じであったが、行事での実行委員の活躍や年度末の「スマホ利用許可」に向けての活動など、生徒の主体的な活動が増えてきている。 ・次年度は、新入生のiPad導入に伴うルールの確認や、スマホ利用の球技大会・千鳥祭への適用などが考えられるので、生徒にICT機器の適切な利用について考えさせる機会を継続して持っていきたい。
	健康環境課	整美・保健・福祉の各委員会で、生徒から活発に要望・提案・企画などが出され、それが反映された活動を実現する。	委員会の担当する業務に対する関心や課題意識を高めるため、各委員会を適宜(年3回以上)開催する。顧問は生徒の提案に対して、その実現性の高低にかかわらず、生徒の意欲を尊重し、取り組みを適切に支援する。	各委員会活動における新しい取り組みの有無で評価。 (昨年度:どの委員会も新規あり) 4:3つの委員会で実施できた 3:2つの委員会で実施できた 2:1つの委員会で実施できた 1:新しい取り組みができなかった	・コロナ禍で、前期は生徒主体の活動は少なかったが、3つの各委員は毎日昼休憩のトイレ除菌作業にあたった。 ・後期は教員から働きかけもしながら、生徒に企画を立案させたい。	B	・各委員会とも活動を検討する場を年3回以上開催し、2つの委員会で新しい取り組みを実施できた。 ・購買移転に関するアンケートや雑菌繁殖実験等、意欲的に活動した。 ・日々のトイレの除菌作業、加湿のため濡れタオル準備などコロナ対策の業務も加わったが、いずれもよく取り組んだ。	3	A	・除菌消毒作業など新たな役割を各委員が担うことになり、生徒負担が多かった。次年度も継続する必要があるが、生徒独自の企画もしっかり支援する。 ・事務室と連携し、水道の自動化・レバー化、非接触検温器の導入など、感染症対策を含め、環境整備にしっかり取り組んできた。次年度もさらなる整備に努める。
	総務課	多様な学習機会を提供し、活動をととして、課題を発見し解決する力の向上を図る。	オープンスクールや千鳥ゼミ、中学校母校訪問、学校説明会で生徒が主体的に活動する場を設ける。	オープンスクールや千鳥ゼミ、中学校母校訪問、学校説明会に運営スタッフとして参加した生徒数で評価。 (昨年度175名) 4:180名以上、3:160名以上、2:140名以上、1:140名未満	・オープンスクールに105名(昨年度138名)の生徒が、運営スタッフ、教科アシスタントとして参加した。行事の規模縮小に伴う減少だと考えられる。 ・今後、中学校母校訪問や千鳥ゼミを行う予定である。	B	・中学校母校訪問に45名の生徒が参加した。7月に実施したオープンスクールと合わせ、今年度は150名の生徒が主体的に活動した。 ・12月に予定していた千鳥ゼミは新型コロナウイルス感染症の拡大を受け中止とした。	2	B	・本年度はコロナ禍のため、予定していた千鳥ゼミや学校説明会への生徒の参加が中止となった。次年度は工夫を加えながら、生徒の活動の場を確保したい。 ・次年度はオープンスクールへの参画やYoutubeへの投稿など学校広報活動に生徒が積極的かつ主体的に取り組めるよう働きかける。
	図書情報課	図書委員会の図書に関わる主体的な活動を推進する。	カウンター当番や蔵書整理を通常の図書委員の仕事に加えて、ブックカフェの企画・運営など図書委員の主体的な活動を支援する。	図書館業務や委員会活動への図書委員の参加率で評価。(昨年度:100%) 4:95%以上、3:85%以上、2:75%以上、1:75%以下	・図書館業務への取り組みは堅調である。 ・コロナ禍により、千鳥祭での図書委員会の活動縮小、読書週間の中止などの影響があったものの、生徒は図書の貸出冊数を増やす新たな企画に取り組んでいる。	B	・図書委員の参加率は100%であった。 ・図書館業務の他に新たな企画として、「図書館だより」での「突撃！先生のおすすめ本」企画、図書委員のお勧め本のポスター作成、クラス別貸出グラフの作成などに取り組んだ。	4	A	・本年度と同様に、ブックカフェや図書館の利用促進に向けた、図書委員会の主体的な活動を推進していく。
		図書委員に地域と連携した図書活動を企画・運営させる。	学童クラブとの交流回数で評価。 (昨年度:3回) 4:4回以上、3:3回、2:2回、1:1回以下	・コロナ禍により、学童クラブとの交流はできていないが、代替となる取り組みを検討中である。	・コロナ禍により、学童クラブとの本校での年3回の交流はできなかったが、1月末に学童クラブ向けのビデオレターを作成した。1年生は「紙芝居」、2年生は「紙人形劇」を行った。	B		1	B	・コロナ禍が収束すれば、例年通りの「読み聞かせ会」を再開したい。状況によっては、ビデオレターの企画を継続発展させていくかもしれない。